

## 寺戸大塚古墳

### ―向日丘陵の古墳時代前期の首長墓―

(財)京都市埋蔵文化財研究所 南 孝雄

#### はじめに

寺戸大塚古墳は、桂川右岸の向日丘陵上に位置する古墳時代前期の北山城を代表する前方後円墳の一つです。寺戸大塚古墳を含む向日丘陵上にある古墳群は、古墳時代前期の乙訓地域の首長墓です。築造順では、五塚原古墳→元稲荷古墳→寺戸大塚古墳→妙見山古墳→伝高島陵古墳となり、時期は3世紀後半から4世紀末で、北山城で最も古い古墳と首長墓群と考えられています。

寺戸大塚古墳は、墳丘の主軸が京都市と向日市の市境とほぼ重なっており、主軸より西側が京都市、東側が向日市となっています。京都市では、平成18・20・21・24年度に墳丘の範囲や遺存状況を確認するため、継続的に調査を行ってきました。今回の調査をもって調査は一旦終了しますが、この一連の調査で寺戸大塚古墳を考える上で新たな知見を多く得ることができました。今日はその成果を報告するとともに、これまでの調査成果と併せ、寺戸大塚古墳を中心に北山城の古墳時代について考えてみたいと思います。

#### 調査の歴史

寺戸大塚古墳の調査は、今回の調査（平成24年8月～10月）を含め、11次にわたる調査が行われてきました。第1次調査は大正12年（1923）で、今からちょうど90年前になります。第1次と第2次調査は前方部の埋葬施設である石槨の調査で、これは箭栽培に際して発見された遺構に対する緊急調査でした。これらの調査によって、三角縁神獣鏡などの銅鏡3面と刀剣類など多数の副葬品が出土し、寺戸大塚古墳の重要性が認識されました。そしてこれ以降、調査は京都府・京都大学・向日市・京都市によって古墳の保存・研究を目的とした調査が行われることとなったのです。現在行われている発掘調査の大部分は、周知の遺跡が開発によって失われることに対して記録保存を目的としているものですが、寺戸大塚古墳の調査の歴史はこれとは違う稀有な例といえます。

#### 立地

桂川右岸の向日丘陵上に位置します。丘陵は北西から南東に傾斜しており、墳丘裾部の標高は後円部のある北側が76.0m、前方部のある南側が72.5mです。古墳の東側は開析谷、西側は小畑川による段丘崖面になっており、古墳は谷と崖に挟まれた高まりを利用して築造されています。後円

部頂上からの眺望は、南側と西側には開けていますが、東側の景色を望むことはできません。逆というと、丘陵の下から古墳を望められるのは南側と西側からという事になります。これは寺戸大塚古墳の視覚的な示威範囲を示しており、当時の集落の位置や交通路と関連していると考えられます。

#### 墳形と規模

全長98m、後円部径57m、後円部高18mを測ります。後円部は3段築成、前方部は遺存状況が悪く不明瞭な部分もありますが2段築成と考えられます。前方後円墳としての平面プランは、これまで現況の地形測量図から柄鏡形と考えられてきましたが、今回の一連の調査によって、前方部は外側に大きく開くことが明らかになりました。柄鏡形の前方後円墳は当時の政権中枢部の大和東南部では、桜井茶臼山古墳やメスリ山古墳など少数しかなく、その意味が問われてきましたが、今回の成果によって大和東南部の一般的な前方後円墳の平面プランを持つことになりました。但し、残念ながら前方部前端の両端部は既に失われている為、正確な前方部の平面プランは明らかにはできません。この為、大和東南部の前期古墳の中に相似墳を見つけ出すことは現状ではできません。また、全長98mという規模は、向日丘陵上に存在する前方後円墳・前方後方墳である五塚原古墳（91m）・元稲荷古墳（94m）・妙見山古墳（116m）と近く、これらの古墳が一定の規範に基づいてその規模が決定されたことが伺えます。

#### 葺石

墳丘にはその保護と装飾をかねて葺石が施されています。寺戸大塚古墳の葺石は、最下部に基底石と呼ばれるやや大振りの石（長さ30～40cm）を並べ、この基底石の上に石（長さ20cm）を積み上げていきます。これらの石の背面には裏込めと呼ばれる小さな石（径5～10cm）が一定の厚みをもって存在します。また、石を積み上げる角度は基底部から高さ50cmまでは急角度で積み上げ、これより上は傾斜を変えて緩やかに積み上げていきます。

古墳時代の葺石には、いくつかのタイプが存在する事が明らかになっています（廣瀬覚「葺石の成立と地域間交流」『吾々の考古学』2008年）。向日丘陵の前期古墳で葺石の構造が明らかな五塚原・元稲荷・寺戸大塚古墳では、それぞれにタイプが異なっています。古墳造営の度に葺石構築法が外部からの技術に影響を受けて行われていた事が分かります。

#### 埴輪

寺戸大塚古墳には大量の埴輪が樹立されています。ほとんどの埴輪が円筒埴輪と朝顔形埴輪と呼ばれる土管形の埴輪で、墳丘の裾部や段築された墳丘の平坦面に一定間隔で立て並べられています。また、後円部の墳頂平坦面の中央には円筒埴輪を密に立て並べ、一辺8mの正方形の区画を作っています。この方形区画の近くからは家形埴輪や鳥形埴輪が出土しています。

五塚原古墳では埴輪の存在は確認されておらず、元稲荷古墳では、円筒埴輪や朝顔形埴輪の祖形である特殊器台形埴輪と特殊壺形埴輪が少数検出されていますが、寺戸大塚古墳のように大量には使用されていません。円筒埴輪の大量使用は寺戸大塚古墳から始まります。2012年の後円部裾で確認された円筒埴輪は、ほとんどが底部を打ち欠かれています。打ち欠きは高さの違う埴輪を揃えるためと思われるが、このようなバラつきが生まれたのは、埴輪の大量生産初期の段階において製品管理がまだ不完全だったからかもしれません。

## 埋葬施設

埋葬施設には後円部と前方部にそれぞれ竪穴式石室があり、墳丘裾部では2基の埴輪棺が検出されています。1967年と1998年に調査が行われています。

主体部は後円部の竪穴式石室になります。後円部頂上の直径15mの平坦面のほぼ中央に設けられています。石室の構築は2段からなる長大な墓壇を掘ります。上段は南北10.6m、東西9.1m、深さ1.6mで、下段は上段の底部にさらに南北9m、東西5m、深さ2.15mの規模で掘られます。石室は下段の墓壇内に、割石を内傾させながら積み上げ構築し、最上部には大きな天井石で蓋がされています。石室の規模は、長さ6.45m、幅約0.8m、高さ1.6mとなっています。石室内底部は、厚さ45cmの粘土で床面が作られており、ここに長さ6.25mの木棺が置かれていた事が痕跡から分かっています。

前方部の竪穴式石室は後円部よりもやや小さく、長さ5.3m、幅約0.9mとなっています。

石室を構築する石材は、ほとんどが近隣で採取することができるチャートや砂岩ですが、天井石の一部には花崗岩（東山または亀岡）や安山岩（大阪府柏原市、香川県）が使用されており、当時の地域間交流の有り様が伺えます。

それぞれの石室内からは銅鏡（三角縁神獣鏡・獣帯鏡・仿製三角縁神獣鏡）・鉄製武器、鉄製農耕具、石製品などの副葬品が出土しており、それらの比較検討から、前方部の竪穴式石室の方がやや遅れて構築された可能性が指摘されています。

## 寺戸大塚古墳から見た古墳時代前期の乙訓地域

ーまとめにかえてー

古墳は墳形と規模によってランク付けがなされており、前方後円墳は最上位にあります。前方後円墳の築造開始が古墳時代の始まりともいえます。乙訓地域では、五塚原古墳から前方後円墳の築造が始まります。五塚原古墳は、最古の前方後円墳といわれる奈良県・箸墓古墳（全長280m）と相似形である事が指摘されており（和田晴吾）、築造時期はそれ程大きな開きはないと考えられます。前方後円墳は、西日本各地の弥生時代の墳墓を構成する諸要素を統合し、飛躍させ生み出されたものと考えられています。初期前方後円墳の特徴的な構成要素は、

1. 巨大な墳丘。
2. 長大な割竹形木棺とそれを納める竪穴式石室の出現。
3. 三角縁神獣鏡などの銅鏡を含む多種・多量の副葬品。

など大きく3つを上げることができます。これらの要素の他に、箸墓古墳には墳丘の段築、葺石の施工、特殊器台形埴輪の存在も確認されています。

向日丘陵の首長墓を見たとき、上に挙げた前方後円墳の3つの要素がありますが、それぞれの古墳には葺石の施工法や埴輪の使われ方など違いがあります。これは古墳祭祀が、前方後円墳の誕生で完成したのではなく、それ以後も変化を続け、首長葬送を行うたびに新たな古墳祭祀を王権中枢から受け入れていたからです。王権中枢は、各地域の首長の在地支配を認める証として共通の古墳祭祀を認め、その間の人・物・技術などを通じて関係を維持・強化していたのでしょう。

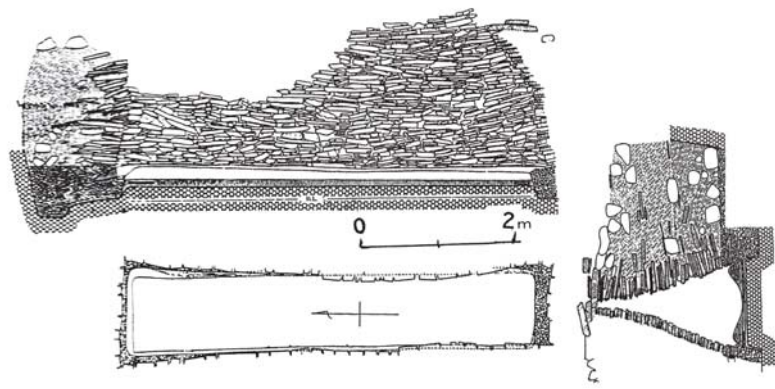












元稻荷古墳

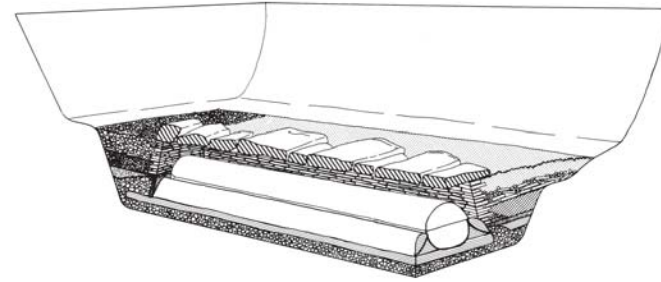
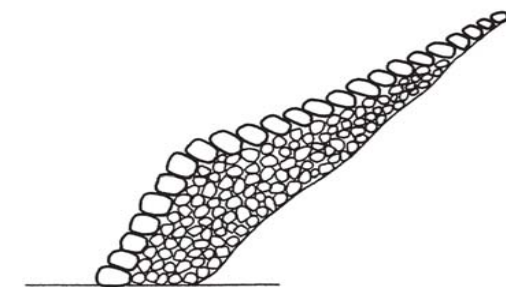
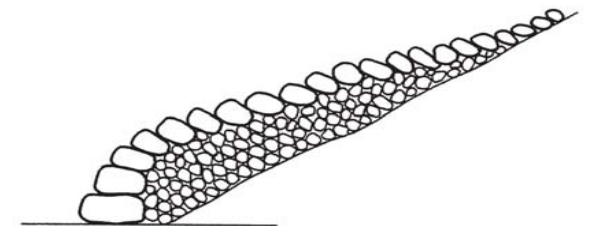


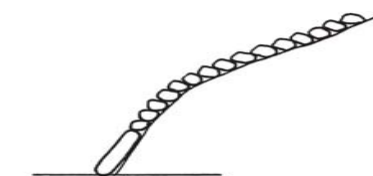
図8 竪穴式石室復元模式図



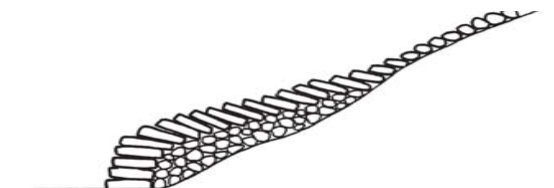
A1類 (桜井市・箸墓古墳)



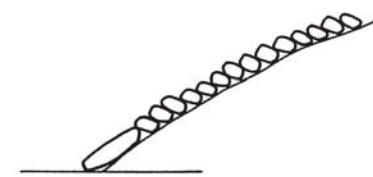
A2類 (寺戸大塚古墳)



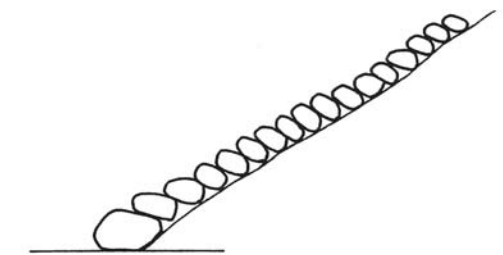
B1類 (五塚原古墳、元稻荷古墳)



A'類 (柏原市・松丘山古墳)

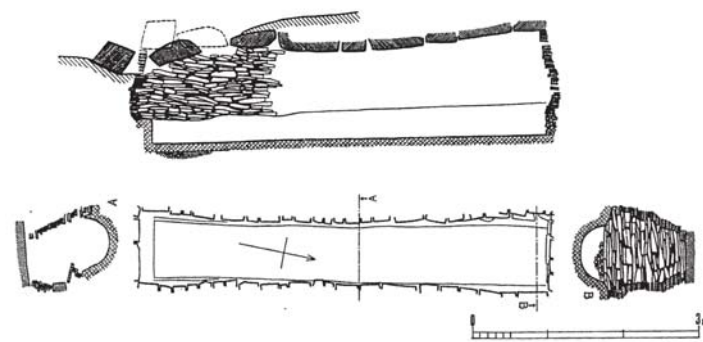


B2類 (桜井市・渋谷向山古墳)



C類 (妙見山古墳)

図10 葺石断面模式図 (廣瀬覚「葺石の成立・展開と地域間交流」『吾々の考古学』より)



寺戸大塚古墳

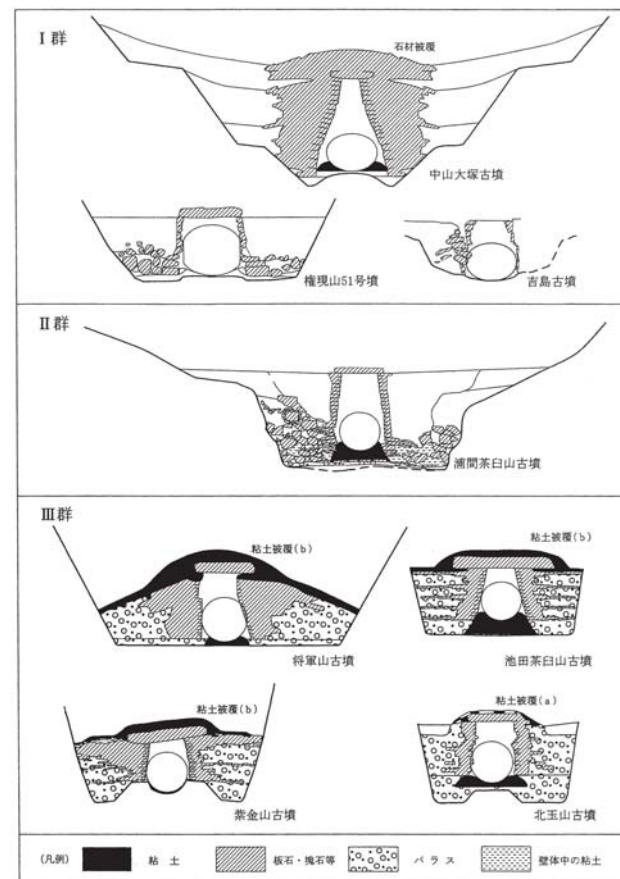
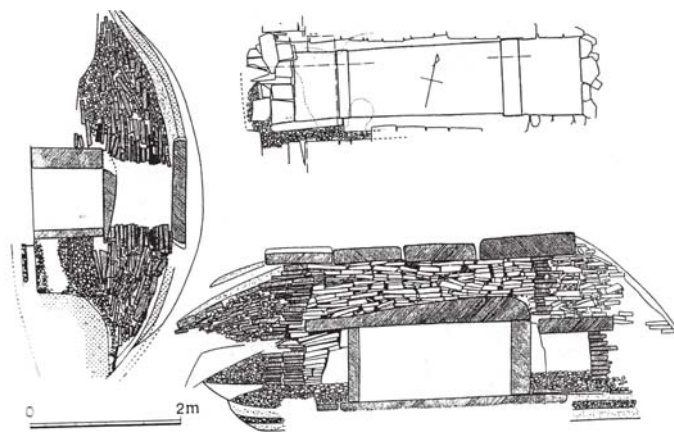


図9 竪穴式石室断面模式図

(岡林孝作「竪穴式石室の成立過程」  
『樞原考古学研究論集』第一五より)



妙見山古墳

図7 向日丘陵首長墓の竪穴式石室

時期	階層		大王	首	長	層	共同体上層
	1	2					
弥生時代	1	前期 ~ 中期中葉					○□□□
	2	中期後葉 ~ 後期前半		○	□	✕	○□□□
	3	後期後半 ~ 終末期		○	□	✕	○□□□
古墳時代	1	前半	●	●	●	■	○□□□
	2	後半	●	●	●	■	○□□□
飛鳥時代	3	中期	●	●	●	■	○□□□
	4	後半	●	●	●	■	●●● 横穴 古式群集墳
飛鳥時代	5	後半	●	●	●	■	●●● 新式群集墳
	飛鳥		■	●	■	■	●●● 八角墳 終末式群集墳

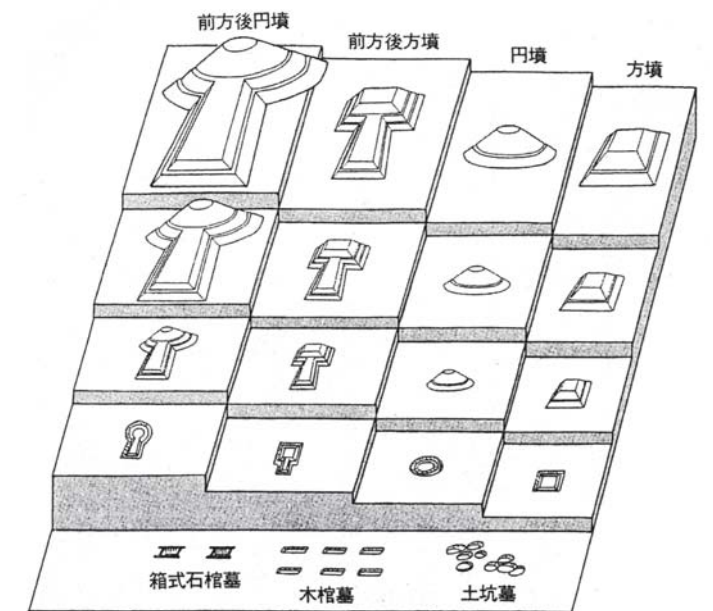


図12 古墳の階層性

(都出比呂志『古墳時代の王と民衆より』)

図11 弥生墳丘墓と古墳の変遷概念図

(和田晴吾「古墳文化論」『日本史講座』第1巻)